

# 宗教心理学研究会ニューズレター

第2号 2004.9.12

## 宗教心理学研究会 *Society for the study of psychology of religion*

### 目次

特集:宗教心理を研究するということ	-----	1
現代人の宗教性から見る、私の宗教心理学の課題	----- ジュマリ・アラム	1
「宗教心理」を研究するということ	----- 安藤泰至	3
「宗教心理」を研究するということ	----- 河東 仁	4
私にとって宗教心理を研究するということ	----- 河野由美	6
研究者の信仰ないし信条について	----- 西脇 良	8
『宗教心理学研究会への期待、要望』	-----	9
宗教心理学研究会への期待、要望	----- 岡村宏美	9
宗教心理学研究会への期待、要望	----- 高木宣行	10
宗教心理学研究会への期待、要望	----- 松田茶茶	11
事務局からのお知らせ	-----	12

---

### 特集:宗教心理を研究するということ

様々な立場の方から「宗教心理を研究するということ」と題して執筆していただきました。この漠然としたテーマゆえに、執筆するのに非常に苦労したとのご意見も多くいただきました。

5人の執筆者がどのように宗教心理について捉えているのかを知ることにより、多くのヒントが得られるのではないかと確信しております。

#### 現代人の宗教性から見る、私の宗教心理学の課題

ジュマリ・アラム(山口大学)

私は以前、新宗教の研究に関心をもっていたが、日本には膨大な数の教団があることに注目し、神々の温床であるというふうに見た。決して「誰でも」というわけではなく、また決して容易なことではないが、普通の人々が教祖や開祖になって宗教を創始することが少なくなく、そのためのお膳立てを周囲が提供して

るという視点である。こうした捉え方をしたときに念頭にあったのは、私のもう一つの生活の場であるインドネシアの宗教事情と比較した場合のことである。

インドネシアはジャワ族が約6割を占める民族構成になっており、民間信仰やシャーマニズムが古くから栄えているが、公式・形式上は、イスラム教とキリスト

教が大多数の人の宗教となっている。実際にも、多くの人の<とりわけ社会的な意味での>宗教アイデンティティや宗教意識を構成している。この場合、民間信仰やシャーマニズムは、公式的には「宗教」とは認められず、宗教外の「信仰」として扱われている。学校での教育や公式な/公的機関における儀式的の現場においては用いられるべきではない、という一般的なコンセンサスが成立している。したがってシャーマンや呪術師のような存在が、仮に新しい教団を創始したとしても、宗教と認められることは、まずないといえるだろう。

もちろんこの場合、実際には、どの分類や枠組みがインドネシアの人々にとっての「宗教」であるのかということは、特に宗教学的にみれば、いろいろな見方が可能である。要はインドネシアの宗教的な空気においては、一般的に宗教は狭く固く理解・定義されているというのが現状である。また、宗教に関する事柄を管轄する行政組織として宗教省(宗教大臣が担当)が存在し、管轄範囲はイスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教にとどまっているが、同国は90年代後半から一層の自由化・民主化に向かい、儒教をはじめとする他の宗教の団体の存在や公式な信仰・実践が認められるようになった。

このような宗教性の世界の中で、私は日本に来る前、母校のインドネシア大学で宗教社会学を助手として担当したことがある。その際に、当然のように心がけていたことは、宗教を通常の人間社会の造物とまったく同列な対象として扱ってそれを赤裸々に云々するというような口調を、極力避けるということである。宗教は「神や神聖な領域によってもたらされた」ものである、という教義的な信念がもろにこうした空気を作り出しているように見えるかもしれないが、必ずしもそう単純なことではなく、またそれが直接的に作用しているわけでもない。宗教は学問と研究の対象であることは了解済みであっても、宗教とは社会や集団生活の一部であると同時に、個々にとっては心に内在する生得的なものであり、それと完全な距離をおくことは、そもそも限界がある、という点がこうした空気を漠然と支配しているとする。つまり宗教的なものを客観視する(信仰という次元から切り離す)ことは可能であっても、それは「内容」(個々の教義で語られていること)を傍らにおくことであって、そうした人間としての宗教的な性向までを空白にするものではないという精神構造が根差しているためである、と私は見ている。

そして私はこの二年間、今度は日本の大学生に宗

教学を授業することになった。前述のような視点から見ると、日本には宗教を広く緩やかに理解・定義する傾向があり、人々は自由な宗教環境におかれている、ということになるはずである。しかし私が授業などを通して感じ取ったことは、インドネシアとはまた別の意味での、狭く固く理解・定義である。

「人間としての宗教的な性向」という面に関連づけて端的にいうと、若い世代に限らず現代日本人の多くは、宗教的なものを心から除去して宗教性を空白にするということが、特別なことではなく、可能であり、また価値観的に見れば、良くも悪くもないが、どちらかといえばそのほうが「無難で良い」、という見方が一般化している。こうした傾向は、必ずしも相互の関係に一貫性があるとはいえないが、いろいろなかたちの観念に、反映されたり連鎖的に影響し合ったりすると見られる。とりわけ次の二点があげられる。

・宗教とは主に、社会に公式に存在するものを指す(いわゆるウィリアム・ジェームズが称えたような、個人的宗教に対する制度的宗教)。

・日本には宗教が豊富に「存在する」が、個々は多くの場合、それらに形式的にしか関わらないので、宗教を「信仰している」「実践している」「もっている」ということにはならない(もっともこの場合、新宗教に類する宗教は、別扱いである)。

いってみれば現代日本の宗教性は、あまり私化せずに(あるいは個人の領域にあまり浸透せずに)、公式な面のみが目立ち、その意味では宗教の形式化が進んでいると見ることができる。なおこうした傾向を、外部から強いられた戦後改革(政教分離や信教の自由の原則など)に端を発するものであるという見方もあるが、どちらかといえばこれは歴史的な重みを持ち、その中で変容・進化し続けている、一民族の宗教性にかかわるものではないだろうか。

私自身の見方としては、宗教には公的な面と私的な面の両方が含まれる。この場合の「公」とは<広く認知された>集団的な表象(個々の宗教による儀礼、礼拝、行事、諸活動など)であり、その究極のかたちは民族や国家の枠組みと一体化してアイデンティティを共有するというケースである。そしてこの場合の「私」とは<主観性を含む>個人的な表象であり、その究極のかたちは個々の宗教経験やヌーメンの感得である。この二つの次元の関係こそが、つまり集団的表象と個人的表象の間に、ある程度の一貫性や循環性が保たれている状態が、宗教を宗教たらしめる様

態である。そして宗教心理とは、宗教の個人的表象の面、あるいは個人的表象の面に還元したときの宗教のことを指し、したがって宗教心理学とは<宗教という文脈の中で>こうした面に注目する学問分野である、と見る。

こうした意味の宗教心理学に私はいま関心をもっているのだが、インドネシアと日本という二つの研究フィールドとの関係で言うと(特に授業するという立場から言うと)、常にジレンマを感じる。この二つは、その宗教性の環境と風土から見て、宗教心理を探求するのに向いているとは決していえない。少なくとも大き

なハードルが立ちはだかっている。いずれも宗教心理を、意識できなくなるほど極端に片方の世界に封じ込み、垣間見ることが許そうとしないからである。前者は、意識の内在化・一体化の方向に、そして後者は意識の外在化・否定化の方向に、である。宗教学は研究対象の善し悪しの価値判断を抜きにすることを原則としているが、宗教心理学を「する」ということは、まず自分自身と人々の「心を開く」ことから始まる、と私は矛盾を抱えながら薄々思っている。

---

## 「宗教心理」を研究すること

安藤泰至(鳥取大学)

私が「宗教心理」に興味を持ち、研究(のまね事)してみようと思立った直接のきっかけは、大学2年の時に『ユング自伝』を読んだことにある。この本は、既成の宗教教団やその教義とは少し離れたところで、人間にとっての「宗教的なもの」を深く問題にしようということ、また学問的な研究と同時に、自分自身の求道的な関心をも追究する道があるということを感じさせてくれたからである。それは一方で、心理学や心理療法が今日の私たちが宗教的なものと向き合うための(唯一ではないにしても)確かな通路になり得るのではないかという期待でもあり、また心理学や心理療法自体が、真に「生きた人間」についての科学であり、治療であるとすればそれらは「宗教的」な次元にまで達していなければならないはずだという要求でもあった。当初漠然と哲学を志して京大文学部に入学していた私は、(教育学部の)臨床心理学には進みにくかったため、ユングにも関心を示されていた上田閑照先生の宗教学研究室(実質的には「宗教哲学」研究室)で学ぶことになった。京大の宗教学では、特定の思想家を選び、そのテキストを徹底的に読み込んで論文にすることが求められる。私が研究対象とする思想家をユングからフロイトに変更したのは、ユングを深く研究していた研究室の先輩(垂谷茂弘氏)に対抗(?)しようとしたせいもあり、読書会を通じて(当時まだ翻訳も出ていなかった)リクールのフロイト論の影響を受けたせいもあるが、漠然とではあれユングのような「宗教的」心理学から距離をとろうとしていたこと(ユングが自身の闘いの中で切り開いた道を「私

自身の状況に即して)追究するためには、ユング思想を研究してもダメだという思い)もその理由の一つに挙げられる。結局フロイトの死の欲動論をテーマにした卒論を皮切りに、その後15年近くの間、主としてフロイト研究にたずさわることになったが、その中で私の「宗教心理」へのアプローチの根幹が形づくられたと言えるだろう。一方で私は、「宗教」から距離をとるために(深層)心理学的な宗教解釈を追究した。この点で、自身の心理学がある面「新しい神学」でもあるようなユングよりも、徹底的な宗教批判者としてのフロイトは研究対象としやすかった。また、フロイトのテキストを徹底して読み込むことは、逆にフロイトが宗教を排除しよう(宗教を心理学的に「解釈し去る」ことによって、その恐怖を封じ込めよう)としながら期せずして「宗教」に巻き込まれていったありようや、ユング、フロムをはじめとする「フロイト以後」の宗教心理思想に含まれる「宗教批判」の契機(フロイトとの連続性)に光を当てることにもつながった。他方で、私はフロイトを一人の「宗教思想家」として読み込むことで、一般に「フロイト理論」とされているものに対しても、あるいは「心理学」という学問や「心理療法」のプロフェッショナリズムからも距離をとろうとした。大学院に入ってから、阪大の社会心理学にいた友人たちとブランドの『とらわれの心理学者たち』の読書会などをやり、心理学そのものやその諸々の流派における人間観や心観を対象化する方法も学んだ。この両方の方向から、「心理主義化する現代社会の中で、宗教的なもの(スピリチュアリティ)への新しい通路とし

ての深層心理学や心理療法」を共感的にとらえつつも、それが性急に「新しい(擬似)宗教」と化してしまったり、既成の社会における一つのプロフェッションとしての機能にそれが解消されてしまうことへの批判的視線を投げかけ続ける、という「宗教心理」研究を進める上での私の基本的スタイルが形成されていったように思う。「心理学理論」としてよりもむしろ「宗教思想」として、フロイトをはじめとする「宗教心理思想家」を読むというこうしたアプローチは、西田幾多郎をはじめとする京都学派の哲学者のテキストを「宗教心理」思想として読み、深層心理学のそれと比較するというような仕事(『宗教心理の探究』所収論文)にも結びついた。また、医学部に転動して以来、生命倫理の諸問題におけるスピリチュアルな次元をめぐる研究に着手したが、そこでもまた、既成宗教の人間観や死生観を最初に持ち出すことなく、現代人の生と死の現場でなお息づいている宗教的(スピリチュアル)なも

のへの視線をすくい上げ、「宗教」と「心理療法」という両方のプロフェッショナリズムを相対化しながらそこに切り込んでいくという研究方法は、直接「宗教心理」や「宗教心理思想」を対象とせずとも、その根本的問題関心の延長線上にある。すなわち、「宗教」からも「心理学」や「心理療法」からも距離をとりながら、私たちをして宗教へ、心理学(心理療法)へと向かわせるその原点に立ち帰って、「今ここに生きる」人間を問い続けていくという態度は、両者に共通している。私が若い頃に夢見たように学問的関心と求道的関心を性急に結びつけようとするのは、両方を台無しにするだろう。とはいえ、どこまで行ってもこの両方の関心を分離できないという「素人くささ」を捨て切れないことは、「宗教心理」研究にはかえって必要なことなのかもしれない。

---

## 「宗教心理」を研究すること

河東 仁(立教大学)

まず「宗教心理の研究」をめぐり、筆者が日頃留意していることから話を始めてみたい。それは「心理主義」という用語をもちだすまでもなく、実験心理学であれ深層心理学であれ、心理学的な手法をもちいて対象とする宗教現象を説明することをもって終わりとしてはならない、ということである。

だがそれでは、「心理主義」から脱するためには、何が必要なのであろうか。そこで筆者が重視するのは、対象とする事象の置かれた同時代的な社会状況、および通史的すなわちその事象が生起してきた精神的な背景にも目を向けるということ、言い換えれば、まわりの社会的・宗教的状況と宗教史的な流れを常に視野におさめておくことである。

次に具体例を通して、以上のことを簡単に説明してみたい。題材にするのは、鎌倉時代末期に『とはずがたり』との題で綴られた日記文学に登場する、二つの「夢」である。作者は、後深草上皇(1243-1304)に仕えた女房の一人、二条と呼ばれる女性であり、彼女は「雪の曙」との仮名で登場する高級貴族との間に女兒を、「有明の月」と記された高僧との間に男児をもうけている。

そして問題の夢であるが、第一の夢は、上皇の目を

盗んで「雪の曙」と密会している時に見たものであり、こののち二条は、「曙」の子を身籠もっている。

二人が一緒に過ごしていた夜のこと、雪の曙から、壁背に松の絵を蒔絵にした扇の上に載せた銀の油壺を渡され、それを他人に隠して懐に入れたところで、はっと目が覚める。

第二の夢は、二条が「有明の月」と同衾した夜のことで、後深草院が見たと伝えてきたものである。「有明の月」は仁和寺の御室の地位にある高僧で、同母弟の龜山院と対立関係にあった後深草院としては、是非とも自らの陣営に引き入れたい存在であった。ちなみに後深草院は持明院統、龜山院は大覚寺統の祖にあたる人物である。つまり後深草院は二条を、いわば高級娼婦として「有明の月」に差し出したのである。しかし二条は、次第に「有明の月」にも愛情を覚えてゆき、彼らの間に二人の子どもが誕生することになる。そして問題の夢は、最初の子を懐妊したと思われる夜、院が見た夢である。

今のお方〔有明の月〕が五鉢を賜ったのを、そなたはわたしに隠すようにして懐に入れたので、わたしが袖を引っ張って、「これほど事情を呑み込んでおるのに、なぜそのような態

度をとるのだ」と言うと、そなたは辛そうに涙を振り払って懐から取り出したのを見ると、銀の五銖であった。これは亡き〔父の後嵯峨〕法皇の御物なので、「わたしのものにしよう」と言って、立ち上がったところではっと夢から覚めた。

さて以上二つの夢をめぐって、従来の研究 管見のかぎりでは、紀要論文をも含め では、もっぱらフロイト的な解釈が施されてきた。すなわち最初の夢では、油壺は女陰、扇は男根の象徴であり、それゆえこれはきわめて性的な夢である。次の夢においても、男根を象徴する五銖を二条が懐に入れている点において、同様に性的なモチーフが濃厚であるといった解釈である。

もちろん筆者は、こうした解釈を全面的に否定するものではない。だが夢は多義的な事象であり、冒頭に示したように、個人的な深層心理を云々するだけでは終わらず、精神的な観点および同時代的な社会的 宗教的状况を視野に入れる必要があると考える。

そこでまずは夢観をめぐり歴史に注目すると、これらがかつて「入胎夢」と呼ばれたモチーフを有しているという事実が浮かび上がってくる。日月や宝珠・金銀、剣といった貴重なものを女性が呑み込んだり懐に入れる様子を夢に見たのち、懐妊が判明するというパターンの霊夢であり、しかもこの夢によって誕生した存在は、長じて聖者や英雄・王になるとみなされていた。人類普遍的に見られる観念であり、我が国でも聖徳太子を筆頭として、法然や親鸞、あるいは楠木正成、さらには豊臣秀吉など枚挙に遑がないほど数々の人物をめぐって語られている。またこの夢によって女兒が誕生した場合は、長じて聖者や王などの母になるとされていた。

ちなみに入胎夢に関する知識は、二条の時代の人びとにとって常識的なものであった。例えば『神皇正統記』に後村上天皇をめぐり入胎夢が記されているが、これは後醍醐天皇の第八皇子であり、しかも母親の身分が低いにもかかわらず即位できたことを説明するための論理として、南朝の人びとが入胎夢をもち出したためとされている。

それゆえ上述の夢をめぐっても、フロイト的な解釈でもって終わりにしてはならず、二条が入胎夢を意識して記した可能性を吟味する必要がある。そしてそのためには、次に、そうすることによって二条は何を告げようとしたのか、あるいは何をしようとしていたのか、が論じられなければならない。

そこでこれら二つの夢の後で生まれた子のその後

について調べると、日記には、「曙」との間の女兒は生まれてすぐ「曙」の手でどこかへ連れ去られ、「有明」との男児もまた生まれてすぐ後深草院の手で連れ去られたことが記されている。そして後の段になって、前者は「曙」の正室の姫君として、後者は院の別の女房の皇子として育てられたことがごく簡単に記されている。

ところが「雪の曙」の正体に焦点を当てると、女兒に関して、興味深い事実が浮かび上がってくる。これまでの研究によって、「曙」が鎌倉時代末に権勢をふるった西園寺実兼(1249-1323)であることが明らかにされている。そして彼の正室所生とされる姫君は二人おり、長女は伏見天皇の中宮となり、次女は龜山院の寵姫となっている。このうち年齢的に見て、実は二条所生の女兒であった可能性が高いのは、後者とされる。しかも彼女の生んだ恒明親王は、龜山院の強い希望と実兼の息子の後押しにより、立太子する直前までいった存在なのである。

すなわち二条は、自分の娘をめぐり入胎夢を『日記』に記すことによって、彼女が国母すなわち天皇の母になる運命をもった生まれであることを示そうとした、より正確に言えば、祈りながら日記に書き留めることによって、入胎夢の孵化・実現(incubation)をはかろうとした可能性が指摘されてくる。

一方、鎌倉幕府第八代将軍が後深草院の皇子の一人、久明親王であったことを考えると、「有明」との間に生まれた男児をめぐっても、二条の秘められた願いが想定されてくる。つまり女房所生の皇子であるかぎり立太子の可能性はほとんどないが、久明親王の母親がやはり女房であったゆえ、別の女房の皇子として育てられた二条の息子が、長じて宮將軍になる可能性は十二分にあった。つまり二条は、仏法を護る法具である五銖のように、自分の息子が朝廷を護る宮將軍の地位に就くことを秘かに願っていた可能性がある。

つまり『とはずがたり』とは、自分の子どもたちをめぐり霊夢を祈りながら書き留めることによって、その実現をはかる「インキュベーションの書」であったことになる。しかし従来の研究において、『とはずがたり』のこうした側面が見落とされてきたのは、昭和十三年に偶然発見されるまで、この書が宮中の奥深くに秘匿されつづけたことが大きく関わっている。すなわちこの間に、明治期を大きな転回点として、「夢見文化」(dream-culture)をめぐり基本的な知識の大半が失われてしまったため、入胎夢にこめられたメッセージ

を読み解けなくなってしまったのである。

もちろん直接的な証拠がない以上、以上の読み解きが最終的に想像の域を超えることはない。しかしそれは、ある意味で人文科学にとっての宿命としか言いようがない面もある。だが少なくとも、フロイト的な解釈をもって終わりとするよりは、精神的な観点、および同時代的な社会的・宗教的状况を視野に入れることで、二条の記した夢、さらには『とはずがたり』と題された日記の意味するところをめぐり、より広い問題提起をすることができるということはお分かり頂けたのではと思う。そして宗教団体のみならず学問の世界でも、社会学においてまでも「心理主義化」の浸透が進行している現在、ここで心理主義の限界につ

いて今一度問うていく必要があると考えるものである。

付記

二条の夢をめぐる考察は、拙論『『とはずがたり』における夢の諸相 入胎夢のインキュベーション』『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』第6号、2004年、67-88頁をもとにしたものである。

また「心理主義」等、宗教心理学の抱えている諸問題についてのより詳細については、拙論「ユング心理学は宗教心理学に何をもたらしうるか」『ユング研究10』名著刊行会、1995年、180-197頁をお読み頂ければ幸いである。

---

## 私にとって宗教心理学を研究すること

河野由美(藍野大学)

7月に入会させて頂いたばかりの未熟者の私が、「宗教心理学を研究すること」について語るのは些か僭越ではあるが、自己紹介を兼ねて、「私にとって」という限定つきで「宗教心理学を研究すること」を述べさせて頂きたい。

冒頭から私事で大変恐縮だが、私は今から20年ほど前までは総合病院で看護師をしており、高度に機械化された病院の中で終末を迎える患者さんと接するうち、末期の人への心のケアの必要性を感じ、心理学を学ぶために8年間勤めた病院を辞し、一から大学に入学しなおした。私が看護師をしていた頃は、終末期医療に関して過渡期とも言える時代で、ようやくターミナルケアへの関心に火がつき、ケアよりケアの必要性や、身体的・精神的・社会的・霊的な苦痛の軽減や、全人的ケアの必要性が少しずつ認識されはじめた時代であった。ちなみに日本における最初のホスピスである、聖隷三方原病院のホスピスが開設されたのは1981年のことである。

私は終末期にある患者さんにより良い心のケアをしたいという目的から、学部では主に臨床心理学を学び、それなりに得るものも多かったのだが、心理検査などを実施するうちに何か釈然としないものを感じた。それは、心理検査等から得られた情報解釈の妥当性に関する素朴な疑問であった。もちろん、心理検査や臨床心理学そのものを批判するものではないが、私のように臨床心理に関しての初心者が、クライアント

の心の状態をあたかも正確に把握できているかのようになってしまうことの恐さでもあった。

ところで日本人の多くは無宗教であることが世論調査の結果から広く指摘されているが、特定の信仰を有していない患者さんであっても、ベッドの枕の下や床灯台にはお守りや般若心経などの経典など宗教的なものを置いている人は多い。癌患者の多くは病に伏し、今まで自分が価値を置いていた仕事、社会活動が実施できなくなり、自尊心、信念、価値観が脅かされる、それに伴い「どうして自分がこのような病気になったのか」、「何かばちがあたったのか」、「苦痛に耐える意味があるのか」、「なぜ」という意味を問う問題に直面せざるを得ない状況にある。そうした「苦難の神議論」(M. ウェーバー)に答えるのが宗教であろうが、特定の信仰を有していない私においても、臨床経験を重ねるうちに「臨床の知」として、末期の人へのケア、生死に関わる医療の問題に対して、宗教の影響を見過ごすことはできないこと、末期患者さんの実存的課題に対応するための広い意味での宗教的な配慮(今日で言う、Spiritual care)の必要性を感じていた。

そして、高齢者は特に神仏や祖先に対して加護の念や自然に対する畏敬の念を強く持っている人が多く、日本人のターミナルケアを考える上では、教義や教団からなる「見える宗教」だけでなく、「見えない宗教」(T. ルックマン)をも考慮する必要があると感じて

いた。しかし、一方でそうした見えない宗教なるものをどのようにして捉えれば良いのか、当時の私には雲をつかむような事であった。

そうした臨床経験を通じて、患者の心の悩み、魂の苦悩、霊的苦痛にどのように対処できるのか、あるいは、どのようになすべきなのかという問題意識が、私の研究の根幹にある。日本人における霊的苦痛や宗教的な配慮の必要性を感じながらも、聖職者でもなく特定の信仰すら持ち得ない私が、ターミナルの患者へのケアにどのようなアプローチが果たしてできるのか、どのような方法論を取るのが自分に適しているのか、学部後の進路に悩んでいた時に、恣意的ではなく科学的な手続をしっかりとふまえて日本人の宗教性を構造的に捉えた精緻な金児先生の研究を拝読し、目から鱗が落ちる思いをしたのを今でもはっきりと覚えている。是非、金児先生のもとで研鑽を積みたいと思い、大阪市立大学の大学院の門を叩き、弟子入りをお願いした。

院生時代には社会心理学的視座から、死に関する態度や宗教性を研究し、幸いにも多くの人の支えから、貴重なデータを蓄積することができた。例えば、インド、ネパール、バングラデシュ、台湾、そして日本の医療関係者への質問紙調査、国内の宗教的基盤のある病院(長岡西病院ビハール病棟、天理よろづ相談所病院など)での医療者や患者への面接調査と質問紙調査である。こうした調査の結果から、宗教は死の不安の軽減、実存的・霊的な苦痛軽減の効果を担うことができるのかという問題に対し、オルポートらが指摘する宗教的志向性(内発的・外発的)とも関連するが、どのような宗教性かによって死の不安や死生観との関連は全く異なったものになることを実証的に明らかにすることができた。繰り返しになるが、日本人のターミナルケアを考える上では、ルックマンの指摘する「見えない宗教」、そして文化的な側面を考慮した「民俗宗教性」を捉えていかなければならないことを、これまでの研究を通じて痛感している。

おりしも、院生時代の1999年には、WHO(世界保健機構)の総会において、従来の健康の定義にSpiritual(霊的・宗教的・実存的)に良好な状態を加えることが審議された。そうしたWHOの見解もあり、行政関係者や終末期医療に携わる者の宗教に対する忌避的態度は少しずつではあるが薄らぎはじめ、信仰の有無にかかわらずターミナルケアにおけるスピリチュアル

への配慮の必要性が徐々に浸透してきている。事実、私が外郭団体のシンクタンクで主任研究員をしていた2002年、行政からターミナルケアの推進にあたり宗教観や死生観の調査をして欲しいとの依頼があり、一般市民(30歳から69歳)や介護保険関連事業施設職員を対象にした無作為抽出調査、遺族や宗教家への調査と、大規模調査を実施した。行政がこうした宗教観に関心を持って調査を実施するということは10年前までは考えられないことではなからうか。

非常に個人的な内容になってしまったが、私の場合、先に宗教に興味関心があって宗教心理の研究を開始したというよりも、ターミナルケアを実践していく上で、宗教(民俗宗教性を含む)が人々の心理に影響することを見落せないということに気づき、宗教心理を研究していることになる。

日本においても、ターミナルにおけるスピリチュアルケアの必要性が徐々に浸透してきているとは言え、まだ、宗教が医療の世界に介入することについて医療者の抵抗は強く、宗教アレルギーが蔓延している状態である。そうした科学性を非常に重視する現在の医療界において、宗教心理をアプローチしていくためには、どうしても客観的・公共的な手続を踏み、信頼性と妥当性のある尺度を用い、再検できる研究でないとなかなか受け入れてもらえない現状にある。しかし現在私は、主に計量的な手法を中心に宗教性と死に関連した態度との関係を研究しているが、質問紙調査では捉えきれない質的な研究も非常に重要だと思っている。

今後は質(事例)的研究と計量(統計)的研究の優劣を競うのではなく、ともに両輪の輪のように研究の蓄積が求められ、様々な方法を多元的に使い、多くの研究者の忌憚ない議論により宗教心理学の発展がなされるのではないかと期待している。そうした宗教心理に関する研究は21世紀の来る少産多死社会においては、時代の要請として求められていると思う。

最後に私の今後の課題を述べさせていただくなら、具体的に日本人のスピリチュアルケアとはどのようなもので、どのような介入なら効果があるのか、臨床での実践を含み研究していきたいと思っている。研究会メンバーの皆様から多くの教えを賜れば幸いである。

## 研究者の信仰ないし信条について

西脇 良(南山大学)

宗教心理の研究にあたって思うところをざっくばらんに書いてみたい。具体的な研究対象や方法論の問題については筆者では荷が重いので、ここでは、なかなかとりあげにくいであろう話題。これはこれでまた別の重圧を感じざるをえないのであるが、にふれてみたい。

それは、研究者の信仰ないし信条、の問題である。これは宗教研究にはつきものの問題であろうし、最近でも本研究会の杉山幸子さんが論じておられる(杉山、2004)。じっさい、はたして研究者が「宗教支持派」や「宗教否定派」に分類されるのかどうかは別としても、(宗教という)研究対象に関心をもち自発的に研究しているのであれば、そこには研究者の何らかの動機なり、姿勢なり、がみられるはずであろう。そしてその動機なり姿勢が、研究のプロセスや結果に影響をあたえるのだとすれば、これはなかなか看過できない問題である。

恐縮ながら私事にふれながら考えてみたい。筆者はカトリック司祭であるが、宗教心理研究に対する基本的な姿勢や構えということを考えてとき、教会における職階制度のあらわれとしての司祭の立場よりも、たまたま日本のカトリック教会の風土の中で生まれ育った筆者自身の「信仰」のほうが、より深く関連しているように思われる。ここで「信仰」とは、継承された「カトリック信仰」のことでなく、40年あまりの宗教生活のなかで得つつある、ある種の「宗教についての了解」のようなもの、を指している。

では、その「了解」とはいったい何か。それは、このようなことを書くとき各方面からお叱りを受けるかも知れないが、「結局のところ、宗教はわからない」という了解である。宗教的回心とか宗教的体験とかいった体験についても、もともと「体験そのものは決して知られない、しばしば本人にも知られない」と思っているふしが、筆者にはある。それはそれでまた別の問題でもあろうが、ここで宗教の営みはわからないというのは、現象として複雑だからあきらめている、という意味ではない。そうではなく、半分は人間の営みであるが、半分はそうではないと了解しているから、である。平たくいえば、半分は「神」の領域である、宗教的体験は神の介入によって成立するのであり、その神の仕事が人間がわかるはずがない、という思い込みがある、ということである。このような宗教のとらえか

たがいか科学的でないかは、自分でも十分理解しているつもりである。宗教を人間の営みと規定しておきながら(宗教心理研究の前提)、半分は人間の営みではない(信仰の前提)、といているのであるから、明らかに論理矛盾である。が、研究者みずからの信仰という事柄にまじめにこたえようとすればするほど、筆者にはこのような表現しか思い浮かんでこない。

それゆえ、筆者の宗教心理研究に対する基本的な構えは、半分しかわからないことについて、そのまた半分以下もわかりえない自らの能力で、あえてわかろうとする、というものである。たしかに、宗教現象のなかから関心のあるテーマを選んできて、調査研究をおこない、仮説として立てられた要因モデルにうまく合致したとか、意外な結果が得られたとか、というのは大変刺激的であるし、更なる研究をおこなう際の主要な誘因ないし動因となりうるであろう。しかしながら、このような研究上での知見と、研究者みずからが人生経験のなかで培ってきた宗教についての了解とは、あきらかに次元が異なっている。

それでは、このような筆者の構えは、筆者の宗教心理研究じたいを阻害し、歪めているであろうか。もしそうであるとすれば、それはいかなる意味でそうなのか。このことについて自ら答えていく、ということがそもそも可能であるのかはわからない。少なくともいえることは、結果として筆者は、宗教心理のコアな部分(たとえば宗教的体験や宗教的回心)への探求、という方向よりは、どちらかというとその周辺、宗教的な環境や文化の側面への関心、という方向を歩んでいるらしい、という点である。そのようなコアな部分に対する畏れの気持ちが働くからであろうか、或いは、そのような自らの「了解」を護ろうとしたいだけなのであろうか...

いずれにせよ、研究者の信仰ないし信条の問題は、あからさまな形ではないにせよ、微妙な陰影を研究そのものにも投げかけるものようである。結果として宗教心理学研究じたいにあたえる影響としては、真であるのに見過ごしてしまう過誤、真でないのに真としてしまう過誤、の両面が考えられるであろう。宗教現象について、じっさいに有るのに無いものとしてしまったり、じっさいに無いものを有るものにしてしまったり、ということが起こりうる。(筆者の場合でいうと、宗教心理のコアな部分をどうしても先延ばしにしてし



まう傾向がある。)これらの過誤を最小限におさえるために重要なのは、多様な視点をもった多様な研究者が存在している、ということであろう。喧々譁々の議論とか、ひたすらな批判、ということをご想定しているのではない。多様な視点をもつ複数の研究者が存在することによって、研究者自らが自発的に多様な視点に開かれていく、ということである。自らの信仰や信条を変更することはできないにせよ、そのことによって、過誤を過誤として自覚できるチャンスは増

えるであろう。

「宗教心理を研究するということ」というテーマをめぐって、なかなか書きにくいことをあえて言葉にしてみた。今後もこの問題 (研究者の)信仰と研究じたいの関係性を、ゆっくり考えてゆきたい。

[文献]

杉山幸子 2004 新宗教とアイデンティティ 新曜社

---

## 『宗教心理学研究会への期待、要望』

第1回研究発表会以後、新たに研究会に加わっていただいた3人の方々に「宗教心理学研究会への期待、要望」について執筆していただきました。

### 宗教心理学研究会への期待、要望

岡村宏美(神戸大学)

まず簡単に私と宗教心理学、またこの宗教心理学研究会と出会ったきっかけを申しあげたいと思います。幼い頃よりキリスト教の教えに触れる事が多く、信者の友人も何人か居たせいもあり私自身には特定の宗教への信仰はありませんが、実際に目で見たり、手に取ったりすることはできないものの確かに存在している「信じるという気持ち」に興味を持っておりました。学部の際には金児先生、杉山先生をはじめこの研究会の会員の先生方の論文を読ませて頂き、自分なりに様々な事を考えました。自分の中で次第に「信じるという気持ち」から「一般の日本人独自の宗教性」(既成宗教への信仰という形はとらないものの、日本人のこころの根底には一貫して宗教的ななにかがあり、それが意識には直接上らない形で生きていく上で影響を及ぼしているのではないか。そのなにかには自然が関係しているのではないか。)に興味があつていきました。

卒業論文では尺度作成を試みたものうまくいわずに断念し、修士論文ではどうにか頑張つてやってみよう、と思った折にインターネット上で本研究会のニューズレター第1号で、ML、HP作成担当をされております西脇良先生の研究に偶然出会い、お願いして

博士論文を読ませて頂いた事がこの研究会入会のきっかけとなりました。この研究会を知った時には周りではあまり宗教心理学を研究している人が少なく、本当に研究としてやっていけるだろうか心配でいっぱいだった気持ちが、ずっと溶けるような思いであったこと、また入会をきっかけに読ませて頂いた会員の皆様の研究の多様さ、クオリティの高さに身が引き締まる思いがいたしました。

宗教心理学研究会への期待、要望についてですが、一度会員の皆様のお考えになっている「宗教」の定義についてまとまった形でお伺いしたいという気持ちがあります。研究者によって定義が異なる形での研究が現在行われており、ひとつにくることが出来ない程に多様な考えを内包しているという意味で興味深いのですが、私のような研究初心者にとってはまずどのような定義づけをすれば研究として意味をなすのか、混乱してしまうところがあるためです。また、研究会のHP上でのデータベースは今後研究をはじめていく者にとっても大変参考になると思います。私もなんらかの形でお手伝いさせていただければと思っております。

これからもどうぞよろしくお願い致します。

## 宗教心理学研究会への期待、要望

高木宣行(龍谷大学)

### 1. はじめに

本論を述べる前に、まず宗教心理学と私自身の関わりについて述べておく必要があるものと思われる。私は仏教寺院に生まれ育ったものの、青年期には仏教受容的ではなかったことや、別の進路を希望していたことがあり、関係者との進路をめぐる話し合いなど紆余曲折を経たが、自分なりに仏教受容的に認知を転換したのち、僧侶資格取得の課程を終え、大学と専攻に関しても、父も習ったことのある心理学の教授のもとで老年心理学や質問紙法による死生観の研究等をする予定で進路を進めた。そのうち個人的には社会心理学へも傾倒したが、停年退職による教授の交代により、後任に発達心理学が専門の教授が赴任されたことから、学部3回生から博士後期課程3回生まで、幼児を対象にした発達心理学や認知心理学<sup>(1)</sup>を専攻し、現在(研究生)に至っている。同時に20歳代半ば頃から、僧職を手伝ううちに、仏教や宗教をしっかり勉強すべきであると感じ、また自分の立脚点が「仏教」と「心理学」に二分されていることにも心地悪さを感じるようになったため、将来的に「仏教を含めた宗教」と「心理学」の間隙を埋めるような研究もしたいと考え、そのような折に日本心理学会第67回大会にて当研究会のことを知り、昨秋入会させて戴いた次第である。よって私は、宗教心理学について、現時点にて本格的に研究しているわけではなくビギナーであり、現在は、諸学派の先行研究から仏教や宗教の問題に対する心理学的なアプローチ方法について検討している所であるが、具体的には(1)自分の将来の立脚点を考える上で、仏教僧侶と心理学者を兼ねた先達の仕事に関心をもち、特に笹本戒浄<sup>(2)</sup>について心理学史的検討をしたり、(2)仏教保育の検討をしたり、と試みているが、(3)将来的には、日常の宗教事象の疑問について、何らかの方法による調査の希望もある。

### 2. 文献目録等について

私自身は未貢献ゆえに申し訳なさを痛感している所であるが、研究会ホームページにおける文献目録やジャーナルのアブストラクト翻訳の公開は、私のようなビギナーにとっては研究における道標になり大変重宝である。また研究会メーリングリストにて関係書籍の紹介があったが、これらも宗教心理学の論点を知る上で重宝であった。このような研究情報共有に代

表される相互扶助的な研究風土の醸成は、研究領域発展にプラスに働くのではないと思われる。

### 3. 将来的には学術誌の発刊を

宗教に関する論文を心理学関係の学会誌へ投稿するには、それなりの工夫を要するものと思われる。今後、本邦にて宗教心理学の成果を積み上げるためにも、将来的には、当研究会でも宗教心理学に関する専門学術誌の発刊が望まれるのではないかとと思われる。手始めに年1回発行、論文2本掲載等からでも試みる価値はあるかもしれない。但し費用や人員の確保など課題はあろう。また宗教心理学は、理論的、方法論的にも多様性があり、各立場の尊重のために部門別に分けての編集も必要かもしれない。

また学術的論点、方法論的検討、用語検討等について、誌上討論形式も含めて、更に活字にまとめていく作業も有効ではなからうか。現在はワークショップにて議論され、結果はニューズレターに記されているが、学術誌や書籍等でも検討するうちに分野間の相互理解も促進され、また研究の裾野も広がるのではなからうか。

### 4. おわりに

いささか身に余る題目を戴き、至らぬ点も多いかと思われるが、また諸先生方にご指導戴くことがあれば幸いである。

[注]

(1)私の発達心理学等に関する研究:研究開始当初は、Werner,H.ら提起した研究文脈において、発達における諸機能の全体構造連関の研究に取り組み、特に言語と運動の発達の関係について検討していたが、その後テーマを分化し、認知と情動の発達の関係の変化が姿勢や身振りや身体動作に及ぼす影響、記憶の検索時および発声時に生じる無意図的な身体動作等について研究を進めている。また言語発達研究の黎明期にDarwin,C.に影響を与えたTaine,H.A.の心理学史的検討から、フランス心理学黎明期におけるMaine de Biran, Ribot,Thらにも関心を持つに至ったが、彼らには宗教心理学に繋がる業績もあるようで、その側面からも関心を有している。

(2)笹本戒浄:元良勇次郎に師事し、唯識などの仏教哲学を心理学者として研究しようと試みた。

## 宗教心理学研究会への期待、要望

松田茶茶(神戸学院大学)

昨年、日本心理学会年次大会において開かれた研究発表会に足を踏み入れ、諸先生方のお話を聞かせて頂いたことに始まり、私も本研究会に参加させて頂くこととなりました。

私の現在行っている研究の内容は「"死の概念"の発達」に関するもので、この研究を始めたその当初は、ただひたすらに発達見地に立つことにしか意識を向けていませんでした。しかし、様々な論文を読み進め、研究を進めてゆくにつれ、"死"を題材とした研究がいかに宗教と切り離せないものかということを感じ痛感するようになりました。しかし私自身は、それまでに宗教というものとの学問的に関わったことがなく、従って、何から手をつけて良いものか、相当に頭を抱えました。そして今以て、自分の研究の中にいかなる形で宗教観を組み込むべきかを模索中です。

海外でなされている研究に目をやると、死に対する不安あるいは恐怖が、個人の宗教的屬性によってどのように異なるかを報告するものを見かけます。また、それらによって精神的健康が左右されるか否かを報告するものもあります。しかし本邦ではまだ、その領

域の研究報告は皆無に近い状態です。海外で報告された結果を我が国にそのまま適用することは当然に無理であり、従って、そのような調査結果を基盤とせねばならないデス・エデュケーションやターミナル・ケア、健康教育等のプログラムの作成のためにも、本邦ではこれから調査研究を拡大的に行っていかなければならない領域だと考えられます。

このように心理学と宗教を重ねて考えることを必要とするとき、その情報源となる専門の機関があるのは大変に心強いことです。本研究会のホームページ掲示板やメーリングリストにおいて時おり見られる、種々の問題に関して行われる意見交換を、毎回楽しみに拝見していますが、その内容を観察すると、やはりここは宗教、形而上的な物議が多いように感じます。しかし、そのような個人内の形而上的な問題(感情、情動、認知プロセス等)を、物理的な数値として扱わねばならない研究を行っている私の個人的な願望で、今後、研究の方法論の領域についても議論を交わす機会が増えれば、と期待しています。

## 事務局からのお知らせ

第2回研究発表会に合わせて、宗教心理学研究会ニューズレター第2号が発行されました。今回の内容は、特集として「宗教心理を研究をすること」、さらに研究会に新たに加わられた方に「宗教心理学研究会への期待、要望」と題して執筆していただきました。

宗教心理学研究会が発足して約1年が経ちました。あっという間に1年が経ってしまったというのが率直な感想です。事務局の勝手から会員の皆さまにご迷惑をおかけすることが多々あり、申し訳なく思っております。研究会活動がより活発になっていくためにこれからも様々なご意見をいただければ幸いです。(KM)

## [宗教心理学研究会の今後の予定]

### 2004年10月

日本心理学会研究会制度申請予定

宗教心理学研究会ニューズレター第3号の原稿依頼

### 2004年11月～12月

宗教心理学研究会ニューズレター第3号の構成・編集作業

第3回研究発表会(日本心理学会第69回大会ワークショップ) テーマ・発表者の提案・検討

### 2005年1月

宗教心理学研究会ニューズレター第3号を発行、配付

日本心理学会第69回大会ワークショップ申し込み

発行:宗教心理学研究会

編集:宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当:松島公望[kobo@yf6.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当:西脇 良[rnishiwk@ps.nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

[http://www.geocities.jp/psychology\\_of\\_religion\\_japan/](http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/)